

生命と機械の間で（１）企業と主体の変容

村田先生、浦井先生、諸先生

村田先生から頂いたメールには極めて根源的な問いが含まれ、きちんと応答しようとするれば、1本の論文では足りず、ゆうに1冊の著作を必要とすると思われます。とはいえ、こういう根底的な問いに向き合う機会はなかなか有りません。この機会に大雑把ながら自分の考えを開陳してみようと思います。秋に学会発表を控え、その準備のためでもあります。

浦井先生には、この間のやり取りを仔細にまとめて頂き、まことに痛み入ります。せっかく掲示板を用意して頂いたので、有効活用できればと思います。個人宛のメールという体裁を離れ、自分用の覚え書きを公開するようつもりで、主題ごとに数本の試論をアップしてみます。

1) 企業と主体の変容

20世紀が企業文明の時代だったと村田先生が総括なさるのは至当だと思われます。同時に21世紀の現在、過去の企業文明が急速に変容し、別の形態に変わりつつあるのも否定し得ない事実です。それは人類文明全体の動向に由来する。いまや企業も個人も大きく変化を迫られている。

たとえば日本では、これまでリーディング・カンパニーとも目されてきた東芝が解体の極みにあります。この問題を扱っているのが大西康之『東芝解体 電機メーカーが消える日』（講談社現代新書）で、著者自身が書いた記事をネットで読めます。

『「日本の電機全滅」はなぜ起きたか 本当の要因——これは避けて通れない道だった』

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/51791>

大西さんによると、東芝や日立製作所といった日本の電機メーカーは「総合電機」と呼ばれ、それが電気製品であればピンからキリまで——ヘアドライヤーから原発まで——何でも手がけてきた。ところがインターネットの普及、およびデジタル技術の革新で様相は一変した。これまで家具のごとく家屋に鎮座してきた、テレビ&ビデオ、ステレオ、パソコンなど家電の機能は、てのひらサイズのスマホに集約された。

ちなみに現代の情報機械の特性は、こうした《集約性》および《縮約性》にあると私は思います。

利益の源泉はハードウェア（＝デバイス）からソフトウェアへ替わり、アップルやグーグルなどプラットフォーム企業が主役になった。ところが「ものづくり」に固執する日本では情報産業の発展が阻害され、総合電機各社が個別にアップルやグーグルを迎え撃とうとした。いわば竹槍で戦闘機を撃ち落とさんとする愚挙と言うしかなく、いまや「電機全滅」状態にある。

大西さんの考えでは、日本の構造転換を遅らせたのは東京電力と NTT である。日本の電機メーカーは、ことごとく東電と NTT の下請けに過ぎなかったと言ってもよい。

国民が支払う電気・電話料金で成り立つ東電・NTT とその下請けである総合電機が構成する経済は、資本主義の皮を被った社会主義だったのだ。いま我々が目の当たりにする「電機全滅」は、冷戦崩壊から 30 年遅れてやってきた社会主義の崩壊なのだ。

日本の企業体は倒壊の極みにあります。なのに経産省の指導の下、今なお原子力産業にしがみついている。ほとんど民族自滅の瀬戸際にあって、日本社会ひいては日本型個人も崩壊しつつある。むしろアメリカやヨーロッパにしても、過去のような企業体は存立し得なくなっている。そのことが社会の不安定要因のひとつになっているように思われる。

「会社」Company ではなく、「企業」Enterprise とは何でしょう。その本質は新しい産業を興こし、それを組織化することで世界人類の福利厚生に貢献することではなかったろうか。「新しい企ての組織化」、この初志がほとんど忘れ去られ、たんなる利潤の追求と利権の分配、ひいては旧態の組織護持に汲々としている。それが今の日本企業の現状のように思われる。個々人の多くもそれに追随している。

これは「主体性」という問題にも関わります。日本では主体性を去勢するシステムが一貫して作動していて、アメリカのような新しい企業家が出て来れない仕組みになっている。出て来たら、寄ってたかって潰す。

これは一般の企業や会社に限ったことではなく、教育や学術や文化の世界においても同様です。この問題を具体的に分析する必要があると、私はつねづね考えています。それはまさに現代日本の経営学に課せられた問題でもあらうと思われます。ことによると、それこそが中心課題であるべきなのかもしれません。

先日ネットで面白い記事を読みました。

「日本の国民性は知識の体系を拒絶する - はてなの鴨澤」(id:kamosawa / @kamosawa)。

日本にオリジナルな発想が存在しないわけではない、と著者は注意を促します。たとえば傑出した数学者を何人も輩出している。ただ問題は「点で生まれるオリジナルな発想を体系化して線にし、誰でも使えるようにしてから面で発展させる」ということが全然できない。

これは私の言葉で言い換えれば、抽象化は得意でも一般化、ひいては標準化ができない、ということの意味します。

さらに問題なのは、日本人には大衆から政治家に至るまで「その場の正解」に拘泥し、知識体系を侮蔑する傾向があることです。

〔専門家を〕尊重し、言うことに耳を傾け、制度を動かすといったことができなければ、本人が去ることですべては崩れ去る。システムで戦うことはできず、世代が替われば一からやり直しになる。これが日本社会の属人性といわれるものの正体である。

著者の考えでは、ヨーロッパ社会は個人主義を前提とし、「自由な発想で全力を出せば、それが全体の力になる」ようなシステムを創りあげてきた。その典型が科学というプロセスである。「記録し、自由に討論し、人間ではなく知識を磨き上げていく発想は、誰が考えても同じような形に落ち着く」。そんな体系性を学ぶことなく、個人の技芸に頼っているかぎり、
「方法論的に原始人となんら変わるところがない」。

私の考えでは、学問は抽象化&一般化した後に、その成果を標準化し、大衆レベルに還元せねばならない。その際には属人性を離脱し、誰にでも利用可能な体系性を構築せねばならない。しかるに、この「還相」ともいうべき標準化の過程を日本の専門人はバカにする。大衆は大衆で、そんな専門家をバカにする。体系的な学問を顧みない。不幸な悪循環が延々と続いている。

抽象化&一般化は、避けがたく閉じた専門集団においてのみ達成される。そうして獲得された専門知識を標準化し、体系化するには、どうしても他者の視線が必要だ。一般人や素人の目線に立ち、全体を基本から捉え返さねばならぬ。知識を他者を開く。そして、そのような専門知の内在的な批判を行なうのが哲学の重要な役割の1つである。別の言い方をすれば、哲学は専門知にとって他者の役割を果たさねばならない。

哲学は固有の1つの領域というより、専門知にいわば「寄生」し、そこから養分を得、その限界を食い破り、相互に新しい知見をもたらすエイリアンのような存在なのです。この意味での哲学は、専門の哲学者の特権ではあり得ない。むしろ誰もが自らの内に1人の哲学者を飼わねばならない。哲学者を育て、養わねばならない。

ことよると大学教育の役割は、専門知を学ぶ学生に哲学の卵を産みつけることにあるのかもしれない。それによって初めて専門知は十全な学問たりうる。

哲学が哲学に自足してはならない。なるほど主体とは環境により限定され、自らを限定しつつ生成する存在でありましょう。アリストテレス的な言い方をすれば、それは包まれながら包む存在、包みつつ包まれる存在でもあります。別の言い方をすれば、主体とは他者との関係においてのみ析出する存在でもあります。

しかるに、このとき「限定」とは何か、「包み包まれる」とは何かを具体的に解明せねばならない。「関係」とは何か、関係を可能にする条件とは何か。これらを説明することが肝要です。いや、それだけでは恐らく足りない、実際に自らが主体として生成するのでなければ。——そこから真の体系性が生じる。

私たちはいまだ十全な主体性に逢着していない。それどころか、主体性を獲得するための条件にすら到達していないのではないか。

あらゆる角度から考える。抽象化し、一般化し、標準化し、大衆化する。そのプロセスの総体が体系化である。

体系化を目ざして観念的に体系化するのではない。リアルな問題を様々な観点から捕捉し、検討し、批判的に吟味する。その有りうべき多様性を表に出す。外に展開し、表現し、説明する。その一連のプロセスにおいて、結果として学知は体系化を迫られる。そのように考え、行動せねばならない。

主体性について語るのは容易でも、それを実現するのは困難を極める。この困難を具体的に捉え、かつ超えること、それが現代における哲学的営みだと私は考える者です。そして、この意味での「哲学」は、あらゆる人たちに課せられている。文明論的な課題だと言ってもいいでしょう。

*

先便での私の主張は、現代の人間は機械化されている。そこから出発せねばならない、というものでした。ならば、そもそも「機械」とは何でしょう？ 以下で、この問題を考えてみましょう。

(つづく)